

Title	高木壬(みず)太郎の足跡をたどって : 1904 年～1906 年
Author(s)	川崎, 司
Citation	聖学院大学論叢, 22(1): 137-153
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=1808
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈原著論文〉

高木^{みず}壬太郎の足跡をたどって
——1904年～1906年——

川崎 司

The Footprints of Mizutarô Takagi

——from 1904 to 1906——

Tsukasa KAWASAKI

世の中の毀誉褒貶に動かされることなく、神霊の活火を燃やし、深遠な真理を求め続けた【高木壬太郎】の、牧師・主筆・教育者として歩んだその人生をたどってみたいという思いに駆られてから30年の歳月が過ぎました。

本稿は、先に『聖学院大学論叢』に発表した「若い日の高木壬太郎」(11巻3号)、「高木壬太郎の足跡をたどって—1889年～1898年—」(15巻1号)、「高木壬太郎の事績を尋ねて—1898年～1904年—」(21巻2号)の続きです。

40歳から42歳までの、躍動する姿を追ってみました。

Thirty years ago I gravitated to the pure character of Mizutarô TAKAGI (1864-1921) and began to study his career. Mizutarô was faithful in the pursuit of truth as a pastor, an editor and an educator, caring neither for praise nor blame.

This essay is a continuation of Mizutarô TAKAGI's Footprints published in 1999.

This essay is an interim report of his life-long search for truth which covers the years 1904-1906.

Key words; Lofty Ambition, A Pure Character, A Faithful Cosmopolitan, A Private Soldier of Jesus, God's Love

『護教』主筆・麻布教会牧師・青山学院教授としての日々

明治 37 年 4 月、白石喜之助が非戦論の立場を明らかにするため敢えて欠席した日本メソジスト教会第 16 年会で壬太郎は、再び麻布教会へ第 7 代牧師として派遣されることになりました。曾木銀次郎の自伝には、その間の事情が次のように記されています。

〈……〔明治 36 年夏〕僕が中央〔会堂〕に来るに当つて武田芳三郎が「今度曾木が中央に来たのは、時を見て高木を教会より追出し自分が取つて替らんとする野心に基くものだ」と高木に焚き付けて居る事を耳にして僕は頗る気を悪くし、高木にしても決して気持のよい事ではなかつたらうし其れが為め吾等二人の友情が一時多少冷却する様にも感じたが、幸ひ其れは左程長続きはしなかつた。高木は当時青山学院神学部の教授（実際は明治 37 年 4 月 23 日に委託された）であつたと共に中央教会（中央会堂）の牧師であつたが、此れは一寸仕事为重すぎると云ふので吾等二人の友情回復後色々次年度の派遣の事などはなし合つて居る内、今度の年会では高木が少し軽い仕事に移らんが為め駒込に行き僕が高木の後をついで中央教会（中央会堂）の牧師にならうとスツカりはなしを決めて居つた所、当時の年会長平岩信保が東京で一旗挙げる積りで派遣委員会に於て到頭吾等の案をスツカリ覆へし、高木は青山に近いとの理由で麻布教会に移り自らが駒込に行く事になり中央には平岩が目的通りおさまる事となつてしまつたのであつた。……）¹⁾

6 月、麻布区東鳥居坂町へ転居。引き続き『護教』に穩健自在な筆をふるい、麻布教会講壇に沈着嚴肅な中に温かい心情を秘めた姿を現し朗々たる清い声で組織ある健全な思想を説き、また高貴な人格と春風のような友情とをもつて学生に接し希臘語に通じ聖書神学・聖書総論に詳しくかつどこまでも研究態度の盛んな青山学院教授として教壇に立つ、一段と多忙な（貧しいながら〈温かき空気〉に包まれた）生活が始まります。²⁾

夏、軽い病気に罹り帰郷。戦争という一大危機に直面して基督教会がどのように国民の要求に応じていくべきか思案しつつ、中川根村青年会で演説をしたり『護教』の社説を草したりして、9 月上旬頃まで静養します。³⁾

秋頃、講読者の減っていく『護教』に有力な編輯補助者・中村忠蔵が加わります。忠蔵こそ激務を負う当時の壬太郎の苦衷を最も知る一人です。⁴⁾

〈私（＝忠蔵）が「護教」の編輯をお手伝したのは、明治 37 年から 41 年の春まで満 4 年足らずで、殆んど 35,6 年前のことであつた。始めの 3 年は、高木壬太郎氏主筆の時代で、毎週火曜日には、麻布教会牧師館の一室で、高木氏とともに編輯に従事した。高木氏は該博なる常識もあり筆力も雄健で、議論も正確且つ相当の闘志もあつたので、基督教言論界では、大に重きをなして居られた。時には、基督教以外の人々からも、共鳴推賞の手紙を受けられたこ

ともあつた。植村氏対海老名氏の神学上の論争にも馳せ参じたことは、世間周知の事実である。しかし麻布教会を牧するの傍ら※であつたから、力を専ら編輯に注ぐことが出来ず、時には教会でなされた説教の原稿を、そのまま社説に代へられたことも屢々あつた位で、此の点いかにも残念と思つた。私なども青山教会牧会の傍らで、種々の会合や、教報の種とりなどに回はることも出来ず、教報雑報などいつも少くして、読者に満足を与へることが出来なかつた。されど高木氏も勿論、私なども、その当時としては最善を尽した積であつた発行部数や会計などは関係せなかつたから、更に記憶に存しない。しかしその時代にも読者側からは、色々な注文があつたやうだ。信仰上の実験談が乏しいとか、教報が少いとか、殊に極端な人々は、救世軍の「ときのこゝろ」のやうなものにしてほしいとか云ふ望みもあつた。所謂高見の見物で、色々な批評もなし得るが、さて実際その局に当るとなかなか思ふやうにはゆかない。或る時本多先生が私たちを励まし慰むる積りなりしか、「基督教の雑誌はなかなか六つかしい、植村がやつて居る福音新報でさへ、発行部数二千に充たないと云ふことである」と云はれたことを記憶して居る。……⁵⁾

旅順陥落⁶⁾を目前に、『護教』は一層激しくプロテスタントの精神を發揮します。

“……東洋の安寧と国家の保護との為めに血を流し肉を裂きて厭はざる我が猛将勇卒を思ふ毎に、吾人亦天国の拡張と教会の進歩との為めに、蹶然起て基督の兵卒たる任務を尽さんことを思はずんばならず。……吾人は旧式の思想と戦はざる可らず、吾人は曲学阿世の学者と戦はざる可らず、吾人は腐敗せる凡ての社会と戦はざる可らず、吾輩は今日の国民、今日の宗教、今日の政党、今日の文部省、今日の大学、今日の新聞雑誌悉く吾人の戦ふ可きものなるを思はずんばならず。……”⁷⁾

国事多難の時に当たり、正統派・異端派などという軽々しい品評を打ち払い、速やかな教会の合同を願って“余の所謂宗教とは宗派に非ず、信仰箇条に非ず、寺院教会の制度・習慣・儀式に非ず、天を畏れ人を愛するの精神也。”⁸⁾と繰り返し力説する壬太郎ら「自由派⁹⁾」の横断する神学界に現代の思潮を認める『独立評論』に掲載された山路愛山の『孔子論』を、その高潔な識見を尊び、“文科大学井上博士一派の学者先生”への反動を乗せて、“近來世に出でたる出版物の最も出色の大文字也”と紹介したのは、他ならぬ泣かず怒らず阿らず常に質実な態度で社会に警告を発する『護教』でした。¹⁰⁾

4月、不平の増大する『護教』に三浦泰一郎（浅草教会牧師）が新たに入り大に志気を高めます。

〈護教の主筆は、其創刊時代より、堂々たる一流の人士で、山路愛山兄より別所梅之助兄、高木壬太郎氏、鷗崎庚午郎氏と相伝して、私（＝泰一郎）はいつも手伝の編輯小僧たるに過ぎぬが、其間、明治31年から名古屋清流女学校に転任し、且33年、平田平三氏が名古屋から横浜に転じたので其後をうけ、名古屋各教会の機関新聞「光」の編輯を引き受けたりしたので、最も関係深かるべき別所兄の時代には、あまり寄書もしなかつた。其以外は、殆んど何

高木^{みず}壬太郎の足跡をたどって

等かのお手伝いを命ぜられて、「護教」という名に何か知ら親しみ深い気がする。……高木壬太郎兄の時代には、名古屋からまた東京の教会に出て来て、お手伝する事になり、「静思」といふ欄で、聖句によつて感想とも説教ともつかぬものを連載した。雑誌新聞の評論、教界の動向思想の論評なども受け持った。編輯会議には与らなかつたが、時々、招かれたり、推参したりして、其方針や経営困難やらを聞かされたものだ。高木兄の筆は愛山の熱はないが、理路整然、筆致暢達、名論文と謂ふべきで、当時の基督教文壇では、断然光つて居つたかに記憶する。……¹¹

転地先の上総片貝¹² から帰ってすぐ、壬太郎は、日露講和条約調印（9月5日）2日前の『護教』に「講和論」（麻布教会説教原稿）を掲げます。

“開戦以来連戦連勝の結果漸く国民の自負心生じ来り、外国新聞杯の御世辭的称讃を真に受けて、武士道を以て世界第一等国の列に入り得べし杯夢想するもの、所謂識者と称するもの、中にさへ少からず。天は此の如き道念の尚甚だ低き国民に、戦勝以上更に光栄ある報酬を与へ給ふべきや。……此の不面目なる講和は国家千古の恥辱にして痛恨に堪えざることには相違なしと雖も、道念の欠乏せる国民に取りては、却て仕合なるやも知る可らず。即ち使徒保羅の言を以てすれば、是れ我國民の傲ぶること勿らんために与へられたる一の刺にして、之を一方より見れば我國民上下の腐敗と慢心とに対する神の懲治、之を他方より見れば我國民を滅亡の危機より救ひ給へる神の恩寵也。果して然らば是れ物質的に失ふて、精神的に得たる也。……仮令武士道は如何に結構なるものなるにもせよ、国家は之れのみを以て救はる可らず、武士道以外更に平民道を發揮せざる可らざるのみならず、真正の宗教に由りて國民の道念を高め、此腐敗と墮落とより彼等を救はざる可らざる事を教へたり。……我等クリスチヤンの眠れるや久し、願くば此国の一大危機に際し奮然警醒し、此國民を率ひて、禍を転じて福となすの道を講ぜんかな。”¹³

兵備拡張論に通じる大和魂を唱えず武士道を謳わぬ壬太郎に、婉曲と寛容に流れる四方美人・八方美人の単称を浴びせる人がいる一方で、〈論理的なり。其議論は大胆なり。基督界の時事を論ずるや頗る常識に富めるを示す。第一流の文字と謂つべし〉¹⁴ と称える人もいました。

明治39年3月、壬太郎は関西学院に芦田慶治・吉岡美国を訪ね、自治自給精神のはなはだ不振なメソジスト派の合同問題について話し合っています。¹⁵ 10日後、壬太郎は、本多庸一・平岩愼保の開書によって催された第1回合同問題協議会（九段美以教会）で運動進行の委員に選ばれ、第2回（3月26日）では各派合同基礎修正案に添えるアメリカ・カナダの合同全権委員宛の書簡の起草を任されています。¹⁶ カナダメソジスト教会総督カーマン Albert Carman と同伝道会社主幹サザーランド Alexander Sutherland 両博士の来日を機に三派合同の議はにわか熱を帯びてきました。

5月4日の福音同盟会は、感情が融和せず、空議空論に終わりましたが、同日本多庸一の発意による「日本メソジスト教会独立期成同盟会」の草案は満場一致で可決され、合同と独立に向けて大

きく前進します。¹⁷一週間後、日本メソジスト教会第18年会で壬太郎は、合同修正基礎案の採用を促し合同全権委員にメソジスト諸派合同の一日も早い実行を訴え、出席のカーマンとサザーランドに強い印象を与えました。¹⁸

奔走の最中、6月21日、義母^{みず}やすがこの世を去りました。¹⁹

雄飛する“神学博士”

明治39年夏、壬太郎は、モンリオールでのカナダ・メソジスト教会世界総会に、日本代議士の一人として出席することになります。¹¹7月6日麻布教会で壬太郎の、翌日には麹町の宝亭で本多庸一と壬太郎の送別会²が開かれています。合同に対する席上の意見は〈樂觀三分、悲觀七分〉³というところでした。

本多が母教会から合同の承認を得るため“打死の覚悟”⁴でアメリカに発った8日後（7月20日）、再び四海同胞の大義を胸に“青年の客”⁵となって横浜を出帆した壬太郎は、11日（この間、同船の小村寿太郎に時局を問う⁶）を費やしてバンクーバーに着いたその日、シアトルの本多から「合同可決」の吉報を受けます。⁷『護教』に〈参派合同す、監督期限八年、再選を得 シアトルにて本多庸一氏七月三十一日発電〉の文字が踊りました。⁸

バンクーバーのメソジスト教会で英語演説を試みた後、8月6日から5日間酷暑の汽車旅行に耐えトロント⁹に到着した壬太郎は合同に真の同情が得られるよう、『The Daily Star』の記者に、あるいはザイオン教会で、トロント在留日本大信徒の集会で、エルム教会エポース同盟会で、切々と日本教界の近状を語り¹⁰、そして9月24日にはカナダ・メソジスト教会総会において日本伝道に関する大演説を行い、出席の人々の心に強いインプレッションを与えました。以下は当日の概要です。

“……先づ加奈太伝道会社が過去三十三年間日本伝道に向て与へたる厚意を謝し、此間に於て日本メソヂスト教会の爲したる進歩を語り、次で日本に於る基督教現時の地位に移り、日露戦争の結果、国民的自覚の生じたること、此自覚は概して基督教に対し同情心を厚くしたること、其結果皇室、政府、官公立学校等の基督教に対する態度の変化したる事、日本人一般殊に学生が宗教を求むるの心盛なる事、過去数年間日本思想界の一角に神秘的傾向さへ顕はれ来り、吾人をしてスペンサー、ヘツケルの時代は既に過ぎ去りたるが如く感ぜしめたる事等を論じ、斯く日本に於る人心の宗教に対する要求甚だ盛なるに拘はらず、基督教会は案外振はず、世人は申すに及ばず、日本の信徒さへ何やら教会に対して物足らぬ如き感を抱けり、其重なる原因は治外基督教に在り、即ち日本はモハヤ外国の教会に治められ、外国の宗派と外国教会の信条とを其僣襲用する時期を過ぎたるに、吾人の教会は尚此時候後れの政策を保持せり、是れ吾人の不満を感ずる所以にして、メソヂスト三派合同問題の起りたる動機

高木^{みず}壬太郎の足跡をたどって

は爰に在り、即ち時代の要求に迫られ、伝道の必要に応じて起り来れる運動に外ならず、幸にして三派の合同全権委員は能く此辺の消息を解し速に合同問題を解決したるは、日本人教師、信徒一同の喜悅と感謝に堪へざる所也との旨を述べ、然れ共合同教会の成立は外国伝道会社の引上を意義する者に非ず、合同教会成立の暁は日本教会は自治の権を享有すべしと雖も、経済上尚外国教会の補助を要するのみならず、日本伝道の野には尚開拓すべき余地あり、且吾人は未だ基督教文学を有せず、又完全なる神学校を有せず、差当り吾人は此の如き者を有せざる可らず。合同は凡て此等の事業を為すに勢力と資本とを集むるに便益を与ふる者にして、要するに合同は協力を意義し、進撃を意義するに外ならず、外国の兄弟等此点に就きて誤解する勿れと警告し、然れ共日本は今日有するより以上の宣教師を要せず、此上要する者は唯学殖、徳望拔群の人にして日本青年教化の任を全うし得べき僅少の人のみ也と論結仕候。……”¹¹

日本青年の強化を果たすことのできる学徳に秀でた宣教師の一人は、イビー Charles Samuel Eby であつたと思われまゝ。「東京演説」の挫折・類焼した中央会堂の再築・中央会堂、自給伝道への抑圧・マクドナルド Davidson MacDonald やカナダミッション本部との軋轢などを負い、明治27年1月寂しく帰国、翌年日本宣教師を解任されたイビーの日本伝道への愛着を深く察する壬太郎は、復歸の道を開こうと力を尽くします¹² が、結局実現しないままイビーは1925年隠退先のカナダのサスカトゥーンで〈上品な教養ある学者、情熱の伝道者、勇気ある宣教師〉としてその生涯を終えています。¹³

9月29日トロントにもどり伝道会社総会に出席。日本メソジスト教会年会の要務を済ませた翌日(10月6日)の朝、壬太郎のもとに、ビクトリア大学評議員会が全会一致で壬太郎への神学博士号¹⁴ 授与を決めたという知らせが届きます。

“八年間夢寐に忘るゝ能はざりし”母校ビクトリア大学に開かれた学位授与式に臨んだ(同じ壇上から「日本伝道の歴史が世界に教へたる教訓」について語った)次の日(10月18日)、壬太郎は、パーウオッシュ Nathanael Burwash 総長の計らいで欧州見聞の旅に発ちます。以下は《日記》に残された紀行です。

“10月19日 ケベック出帆。大西洋の荒波に悩まされる。24日 同船客に請われるまま「日本近時の進歩と基督教の現時に於ける地位」について語る。26日 リバプール着。リバーサイド駅から汽車で4時間、大都ロンドン・ユーストン駅に降り立つ。27日 広大美しいセント・ポール寺院を見、ハイドパーク近くの日本人大使館を訪ね(陸奥宗光〔東洋英和学校出身〕と談話数刻)、バッキンガム宮殿、セントジェームス公園を通過して、ウエストミンスター寺院に至る。(ウエスレー兄弟の大理石像に面し敬畏の念に打たれる)テムズ河畔に聳える国会議事堂を見やり、ビクトリア公園に咲き乱れる紅白の菊花に日本の秋を想う。28日 ウエスレーチャペルへ。(英国風紳士を生み出すオックスフォードのいかにも古びた

高木^{みず}壬太郎の足跡をたどって

多くの建物を見たのも、シティーテンプルの牧師の平凡な説教に失望したのもロンドン滞在中のこと。① 11月5日 ビクトリア駅から二等汽車でニューヘブンへ。更に船でフランスのジェップに渡り、パリ・サンラザール駅着。`美術の化身、ともいうべき`世界第一豪奢の都、に降り立つ。6日 ルーブル博物館、ナポレオンの墓、凱旋門など地下鉄を利用して見て回る。7日 ノートルダム寺院、リュクスサンプル館、パンテオン、パリ大学などを見物。8日 広壮華麗な市庁と館内の天井画・壁画に驚嘆。実際の・堅牢・単純素朴な英国人と、理想(空想)的・華麗・軽快華奢な仏国人を対照して Anglo-Saxon superiority を強く実感しながら、リヨン駅を発ちローマへ直行。10日 34時間近くかかってローマ着。生気のない`喪家ノ狗、のよう。サンピエトロ聖堂で、木像や古聖賢の墓上の床に接吻している善男善女、聖霊を受け入れるため頭の真ん中を剃ったローマ教の僧侶を見て浅草の観世音を連想、基督教が基督教会となりその教会が遂には儀式に変じたため基督教が誤解されてしまったことを嘆く。② 11日 イタリアの天長節に当たる雑踏の日曜日、サンタマリアジョーレ聖堂、コロセウム、パンテオン、ローマ大学などを見物。聖書を読むことを禁じられた信徒の頭上を空しく流れる僧侶の読経を耳にして「嗚呼アハレなる羅馬よ」の嘆息をもらす。12日 バチカン宮殿を訪れ、中世の「神」という観念は絵画・建築・美術などあらゆるものに現れていることを実感する。③ 使徒ヨハネの眠るラテラノ聖堂、古代ローマの地下墓所・カタコムにも足を運ぶ。13日 ローマ終着駅から`欧州第一喧囂ノ市街、ナポリへ。(ポンペイの遺跡もベスビオの奇勝も訪ねる間なく)エジプトに向けオリオン号に乗船。地中海上、壬太郎の名を知るカナダ・メソジスト教会の一青年牧師(ビクトリア大学卒業後オックスフォード大学で更に神学を学び帰国して実地伝道に従っていたが、近代思想の影響を受け旧信仰が維持できず1年休職を請い欧州観光の途にあった)に出会う。④ 18日 アレクサンドリアに投錨。回教のクリスマスを祝す土着の人々で賑わう塵埃の市街を歩く。20日 オーストリアンロイドの汽船でポートサイド着。21日 白砂の中、4時間半急行列車に揺られカイロへ。22日 雑踏のムスキー街を歩く。23日 電車で3里、ナイルの濁水を右に古カイロへ。24日 エジプト王の通輦を見る。25日 午前9時アメリカミッションのアラビア語サービスに、午後6時英語礼拝に列席。26日 駱駝に乗りピラミッドを見る。暴風雨に遭う。27日 カメル街の日本雑貨店々主と語り合う。ムスキー街を散歩、葬儀を興味深く見る。28日 カメル街の日本雑貨店で憩う。ポートサイドに戻る。(この間、教会・床屋・菓子屋・トイレ・馬車で不当な金を要求され、`悪国、の印象を強めた。)その後、イギリス大使館から旅行の許可をもらいパレスチナへ赴く。⑤ [以後、経路不明]¹⁵⁾

明治40年1月2日、およそ半年ぶりで日本の土を踏んだ壬太郎は、静岡での休養もそこそこに東京へもどっています。¹⁶⁾ 今や〈郷土の大先覚者・立志伝中の人)¹⁷⁾ となった「神学博士」を、親族・

知友が一日千秋の思いで待つ上長尾に向かったのは2月21日。弟愛助と設えた故人(その子、俊子、木三郎、やす)の石碑に額づく壬太郎の心のうちには、“何事ヲ問ハス学フ所ノ者ハ必ス皆確實ノ地位ニ到達シ得ヘキモノナルコトヲ望ム勿レ”¹⁸⁾ という若い日の戒めが込み上げていたはず。壬太郎は、春風の吹く故里で東の間の愉悅を噛み締めました。

注

凡例

- ◇引用文中、漢字は原則として新字体に改め、仮名づかいは原文にしたがった。句読点を必要に応じて付した。漢数字は、一部算用数字に直した。下線は筆者による。
- ◇壬太郎没後、抜き書きされた壬太郎の備忘録(未見)を《日記》(東京神学大学蔵)と記した。
- ◇“ ”…壬太郎文から引用、〈 〉…他の文献から引用
- ◇【 】…所蔵先、(=) []…筆者による注、(→)…参照、《 》…日記・覚書・草稿・書簡
- ◇M = 明治、T = 大正、S = 昭和、H = 平成

『護教』主筆・麻布教会牧師・青山学院教授としての日々

① 《曾木銀次郎日記》【曾木節氏】

“〔明治37年〕4月12日 火 晴 今朝ヨリ年会議開カル。午前9時ヨリ特別牧師会、12時閉会。午後2時ヨリ派遣委員会ヲ開ク、余亦委員中ニ在リ。5カ年ヲ以テ牧師年限トナスノ条文、總會ニ於テ削除サレタリト平岩氏ノ報告シタリシハ誤ナリシヲ以テ、本年ハ大更迭ヲ行ハザルベカラズ。平岩氏ハ甲府ニ6年、余ハ中央ニ5年、其他此類多シ、頗ル困難ヲ極ム。平岩氏自ラ中央会堂ニ出デントノ下心アリ、余ヲ甲府ニ薦ム、甲府教会亦余ノ来任ヲ切望セリ、然レ共余ハ一方ニ護教ト神学校トノ事業アリ、他方ニ小野ト同部内ニ働クヲ好マズ、断然甲府ニ赴クヲ辞セリ。遂ニ余ハ麻布ニ往クニ決セリ。11時漸ク閉会、12時帰寓。”《日記》

② 「肅んで高木主筆足下に一書を呈して以て評論に代ふ」柏峰生『護教』M 38.11.11、高木一三《高木壬太郎紀念録作成ノート》T 11【東神大】

“〔明治37年〕6月16日 木 陰雨 本日午後青山神学校ニ往キ教授。……”《日記》

〈明治37年以後、高木が美以教会系統の青山学院神学部¹⁹⁾に教えたのは、カナダ・メソヂスト教会系統の東洋英和学校が既に廃校になり、神学教育を青山と合同したからであって、後にカナ・メソは関西学院神学部と合同したが、高木は青山に踏み留まった。……〉(比屋根安定『教界三十五人像』S 34)

〈……我邦に来て居る宣教師は大概年俸千二百弗であるが、之に比べて見ると我邦の牧師の給料は甚だ少い。平均したら年俸僅か四五百であらう。大阪の宮川経輝氏が月給百円?之が最高額であるそうだ。東京で名の聞へて居る海老名弾正、小崎弘道、植村正久、平岩愼保、高木壬太郎諸氏の如き人々も百円以上ではあるまい。斯様に収入が少いから衣食住も甚だ質素である。出る時成るべく車に乗らぬ算段をし、流行の衣服は着ぬと云ふ覚悟。毎日梁肉に飽くなどは思ひも寄らぬことである。トテモ世間並に花月遊山に車を連ねて飛ばせ、昼食は梅川とか八百松とか云ふ仕掛に行かないので、外から見ると甚だ面白く無さそうであるが、併しそうでない。大にそうでない。温かき空気は確か

- に其の中に通つて居る。一家団欒の樂は正に其裏に籠つて居る。……) (「牧師の平生」武田藍涯 (= 武田芳三郎) 『女学世界』 M 37.11)
- ③ 「田舎雑感」高木壬太郎『護教』 M 37.9.17
 〈〔個人〕本社主筆 本月末には帰京の予定なりしが、医師の勧告もあり来月初旬まで静養せらるゝ由) (『護教』 M 37.8.27)
- ④ 「〔雑録〕編輯局の一週より」な、ち、 (= 中村忠蔵) 『護教』 M 37.10.1
 〈……〔4月10日月曜日〕護教委員 (= ビショップ Charles Bishop・別所梅之助) ——報告……一、協同各ミツシヨンの補助金増加したるを以て財政の状況は良好なり。二、講読者の減じたるは遺憾とする所なり。されど今年に於ては、諸君の同情によりて必ず多数の読者を得べきを望み又信ず。……) (『美以教会第廿二回日本年会記録』 M 38【青山学院資料センター】)
- ⑤ 「思ひ出づるまゝ」中村忠蔵『日本メソヂスト時報』 S 15.9.20 (→「教友中村忠蔵牧師」倉永巍『日本メソヂスト時報』 S 16.11.14 ※ 〈〔教界〕○麻布美以教会 同教会日曜の礼拝説教には平均二百二十三名の出席者あり、尤も其の多数は英和女学校*麻布中学校の生徒なり。日曜学校は平均七八十名の出席生徒あり、教会一ヶ月の収金は約四拾五円内外なりとす。婦人会には牧師高木壬太郎氏毎月一回講話をなし居れり。聖書研究会は毎金曜にミス・パークレー及ミス・キラムの講義あり。婦人矯風会は目下慰問の袋募集に尽力しつゝあり。〉〈〔教界〕○麻布メソヂスト教会 日曜礼拝には三百乃至三百五十名位来会、牧師高木壬太郎氏説教、祈祷会は水曜日に英和学校寄宿舎に於て木曜日は教会に於て開会合せて七十名許り出席す、毎土曜日は青年会の例会を開き金曜には婦人会を催しキラム嬢担任講話せらる……) (『基督教世界』 M 38.2.16, 5.18) * 〈……筆者が、神の導きと、ミス・ハーグレーブの厚意により当母校に入学した明治三十八年頃は、麻布教会牧師は高木壬太郎先生、本校校長はミス・ブラックモア、聖書の先生は小林先生で、日曜礼拝と相俟つて若き心に非常の感激を与へたものだった。日曜礼拝には必ず筆記帖をたづさへて行き、牧師の説教を洩れなく筆記をした生徒が多かつた。高木先生の麻布教会で説かれたものは、他日「基督教安心論」と云ふ本となつて出版された。今日でも記憶に残つてゐる先生の言葉の一つは、「ヤソのヤソ臭きは本ヤソに非ず」と言ふ句である。……) (「宗教教育」比屋根ゆき子『東洋英和女学校五十年史』 S 9) * 〈……私は先生がまだ麻布教会の牧師を遊される前から存じ上て居りました。そして其当時から時々麻布教会には出なされお説教を遊しました。今度の日曜には高木先生のお説教だと云ふと特別皆で喜んで聞きに参つたもので御座ます。なぜならば先生のお話は何時もおもしろく解り易くそれでお説教の中にはきつと誰れにでも解る様な譬話を幾つもお引照しに成りました。其当時先生のおっしゃった御言葉の内でも今でもどうしても忘れる事の出来ないのは次の文句で御座ます。「味噌の味噌臭きは上味噌に非らず耶蘇の耶蘇臭きは上耶蘇に非らず」成る程先生御自身は少しも耶蘇臭い処はありませんでした。然も世局の色々の内情によく通じて居られ何時も其人々に適切なお話を遊しまして少しも形式に流れる事無く聖書の意味を平に採つて居られました。聖書の中の神の御言葉を日本人に御説きに成る時決して丸呑にはおさせに成りませんでした。何処迄も細く噛み砕かれ能く消化し易い様に遊されましたので如何にも味がよく直に消化されたので御座ます。尚又先生は常識に富んで居られて人を神に導く特別の力を与へられて居られた様に思はれます。……) (伊丹小夜子《高木先生を惜みて》 T 11【東神大】)
- ⑥ 「〔明治 38 年〕一月一日 日 晴……旅順包圍軍ヨリ松樹山砲台占領ノ旨電報アリシ由ニテ号外出ヅ。元日ヨリ吉報ニ接ス、喜ブベシ。……一月二日 月 晴……今朝旅順陥落ノ吉報ニ接ス、云ク昨日午後五時頃、旅順攻圍軍ハ敵ノ守将ステツセルヨリ開城申込ノ書ヲ受ケ、目下開城ノ条件及順序ニ付談判中ト。新年早々此吉報ニ接ス、国民ノ歡喜知ルベキナリ。……」《日記》
- ⑦ 「戦闘的態度を取るべし」『護教』 M 38.1.2
- ⑧ 「攻守同盟」 M 38.1.7, 1.21, 「速に合同問題を解決すべし」 M 38.11.4 共に『護教』の壬太郎文。文明堂編『学生と宗教』 M 39 所収
- ⑨ 〈日本にて「メソヂスト」教会と云へば所謂正統教会の嫡々にして嚙かし旧神学を固執することな

らんと思ふものあるべけれども、何ぞ因らん、其機関紙たる「護教」（高木壬太郎氏主筆）に至つては神学の自由を主張し、教会は神学の同じき処に於て合すべしと説くものならんとは。さらば其の宗教的の意識とは何ぞと云ふに護教記者の意は「基督を通じて天父を信じ、天の王国を地上に建設せんとする」こと是なりとするに在るもの、如し。其「基督を通じて」と云ふの意にして若し「基督の信仰の如く」と云ふに均しからんには、是れ蓋し極端なる自由派と雖も異論なき所なるべき乎。

「メソヂスト」教会にして既に此の如しとせば日本の神学界は自由派の横断する所となれりと云ふも可なり。亦以て現代の思潮を見るべきに非ずや。〉（「基督教会に於ける自由主義」山路弥吉『独立評論』M 38.3.3）〈日本の耶蘇教会は自由思想の勝利となりたりと云ふべし。今や「福音新報」に植村正久先生あり。「新希望」に内村鑑三先生あり。猶ほ福音主義を一方に維持すと雖も、殆んど大軍に囲まれながら孤城に拠るの概あり。自由主義は耶蘇教会内に汎濫して、殆んど到らざる所なく、海老名弾正氏の「新人」は翼なくして天下に飛ぶ。……「メソヂスト」諸派の機関新聞「護教」の調子は最も自由に傾き論理の許す所は如何なる教理をも歓迎せんとするの態度を示す。自由研究、自由討論の声は聡明なる耶蘇教会の輿論を支配し、所謂「オルソドキシイ」、所謂福音主義なるものは今や形を潜めんとするもの、如し。而して之と共に教会独立運動亦漸く盛んならんとす。……「メソヂスト」諸派の機関たる「護教」も独立の已むべからざるを唱へたるが如き亦皆其一例なり。……〉（「耶蘇教会」山路弥吉『独立評論』M 39.2）

10 「孔子論を読む」高木壬太郎『護教』M 38.4.15, 「〔思潮概観〕○基督教の弱点「護教」『無尽灯』M 39.1

11 「護教の思ひ出」三浦泰一郎『日本メソヂスト時報』S 15.9.27 (→「青山評論」記者・三浦泰一郎論)辻本雄一『国文学研究』S 50.2)

12 〈〔教界〕○麻布メソヂスト教会……高木牧師は先月下旬千葉地方へ避暑せられ……〉（『基督教世界』M 38.8.17）、〈〔個人〕本社主筆 上総片貝滯在中諸処より演説の依頼を受け、八月一日は東金町高等小学校同窓会に於て、同二日は同校女子部同窓会に於て演説し、同五日は片貝村有志者の依頼に由り同処にて宗教上の演説をなし、同十四日には片貝村高等小学校及び其他一ヶ処の高等小学校に於て午前午後二回の演説をなしたる由來信の一節に見ゆ〉（『護教』M 38.8.19）

13 「吾人の講和観」『護教』M 38.9.9

14 「〔文学及び思想〕耶蘇教諸雑誌の批評」山路弥吉(?)『独立評論』M 39.3

〈……平岩愷保氏は、高木君の罵倒談も仲々凄しいものありと云ひ、山路愛山氏は曰く、高木君は撞けば鳴る、撞かざれば黙して居る釣鐘の如し、ゴンゴン打つべしと云うひ、木下尚江氏*は曰く、余り優しくて力の入つた話が出来難しと、曾木銀次郎氏曰く、磊落にして打遣な処ありと、各人の評を比せば一見矛盾する処ある如し、而も各々一面の真理を含まずんばならず。……〉（前掲「肅んで高木主筆足下に一書を呈し以て評論に代ふ」）* 〈〔教界〕○麻布メソヂスト教会 去四日五日両夜大演説会を開き……翌六日礼拝には牧師高木壬太郎氏の「品性と事業」てふ説教あり夜江原素六氏は「モーセの離婚律」木下尚江氏は「悔改めよ」なる題下に何れも縦横所信を述べられ両夜共四百名余の聴衆ありし非常の盛会なりし、十二日礼拝には高木牧師の「青年なる耶蘇」同夜は「執着論」ありたり目下礼拝来会三百名位其他追々活気を呈しつゝあり、〉（『基督教世界』M 38.11.16）

15 「神戸行の記」秋紅生(=壬太郎)『護教』M 39.3.10

〈……今回貴教会代議士として総会ニ御出席御苦勞之段奉万謝居候三派*合同之件ニ就而ハ是非成功を取る様特ニ御尽力奉願居候当教会ニ於而も引続き尚種々手配尽力致居候……〉（《高木壬太郎宛吉岡美国書簡[M 39.7.18]》【東神大】）* 〈この三派は我日本に於て勢力ある教会にして、監督美以派とは監督ハリス、本多庸一氏等を頂ける青山学院の一派、北派とは江原素六、平岩愷保氏等の率ゆる麻布学校を中心とせる一派、にして共に関東に根拠を固め、南派とは関西学院を中心として関西地方に拡がりをもつ一派なり。……〉（「美以派の合同問題」朝陽『基督教世界』M 39.5.24）

16 「〔教報〕○合同問題協議会」M 39.3.15, 「〔教報〕合同問題第二回協議会」M 39.3.26, 「合同全権委員に呈する書」M 39.3.31 以上『護教』

- 17 「メソヂスト諸派の合同と独立問題」M 39.3.31, 「メソヂスト諸派の独立に就て・福音同盟大会」M 39.4.28, 「メソヂスト諸派の合同及び独立」M 39.5.12, 「メソヂスト諸派合同問題の成行」M 39.5.26 以上『護教』の壬太郎文
“〔明治 39 年〕八月十一日 土 暑気頗ル甚シ……朝食ヲ喫シ、伝道局ニ往キ、サマランド博士ニ面会、メソヂスト三派合同成立ニ関スル委細ノ事ヲ聞ク。氏ノ談話ヨリ察スルニ独立期成同盟会ノ設立ハ此合同ヲ成立セシムルニ与テ大ニ力アリシガ如シ。……”《日記》
- 18 「自から物せられし高木博士の伝記」聖山生纂『開拓者』T 10.4, 「〔教報〕○日本メソヂスト教会第十八年会」『護教』M 39.5.19
〈○演説会 五月十一日午後七時半同教会ニ於テ高木氏「活ケル宗教」ト題シサマランド氏ハ「日本ニ於ケル基督教ノ現在及将来」ト題シテ演説セラレタリ……○両博士ノ来朝ニ関シ 高木氏ノ動議ニヨリ全会ノ一致ヲ以テ左ノ決議ヲナス 我年会ハ総督カーマン博士及外国伝道会社総書記サマランド博士*ガ日本伝道ノ最モ緊要ナル時ニ方リ其老齡ヲ厭ハズ我国ニ渡来セラレ親ク我国ノ現況ヲ視察シ且年会其他ノ諸集会ニ出席セラレテ諸種ノ問題ニ就キ吾等ノ意見ヲ徴シ亦自ラ意見ヲ述ベテ吾等ヲ指導セラレタルコトヲ感謝ス我等ハ両博士ガ齋シタル使命ヲ聞キ感謝ニ不堪益々基督ト教会トニ忠実ナランコトヲ期ス而シテ我等ハ両博士ガ無事ニシテ本国ニ帰ハラレ我等ガ加那陀メソヂスト教会ニ対シテ有スル感謝ノ情ヲ伝ヘラレンコトヲ望ム〉(『日本メソヂスト教会第十八年会記録』M 39) * “……明治三十九年にサマランド氏はカーマン博士と共に来朝せられたが其使命は日本に於てメソヂスト三派合同の必要あるや否やを視察する為であつた、私はサマランド氏が最初から合同に賛成であつたとは思はぬ、しかし日本へ来てから日本人側の意見を聴て大に合同の必要を感じられたやうである。……”(「加奈陀メソヂスト教会三傑の一人、故サマランド博士」『護教』M 43.7.16)
- 19 〈〔個人〕本社主筆 母君の病気を見舞はんが為め去る廿九日郷里に赴かれ、六日帰京せられたり〉
〈〔個人〕本社主筆には去る二十一日郷里にある母君を喪はれたり、深厚なる同情を表す〉(『護教』M 39.6.9, 6.21)

雄飛する“神学博士”

- 1 〈〔教報〕○日本メソヂスト派総会代議士 来る九月加那太に開かるゝ総会へ出席代議士として、デー・ノルマン、高木壬太郎、山口三之助、渡辺沢次郎の四氏選定せられ、予備員には平岩愼保、米山豊の二氏選挙せられたり。〉(『護教』M 39.5.19)
- 2 〈〔教勢〕○麻布メソヂスト教会*高木牧師は加那太モンリオウルに開くべきメソヂスト派総会に出席のため渡米せらるゝを以て本月六日教会にて送別会を開き凡て二百四五十名の出席者あり、同牧師は廿日出帆の加奈太船にて渡米の途に就かれたり。同牧師不在中は松村介石、小畑久五郎、山田寅之助、江原素六、高木正義、山路弥吉、ボルデン、コウツ諸氏交々説教せらるべし。〉(『福音新報』M 39.7.26) * 〈〔教界〕○麻布美以教会 高木壬太郎氏の牧する所、財政の上に於て十年來の独立教会也。日曜の朝九時より英語聖書研究及び日曜学校あり。……十時より礼拝説教あり、集會者凡そ三百名、夜の説教には出席者百名内外なるを常とす。四月第一日曜日に於ける題は、朝、「努力的生活」夜、「利己心と自愛心」なりき、当日六名の受洗者(男四、女二)あり。木曜の夜は一時間、高木氏聖書を講ず。馬可伝の批評的解釈也。出席者二十名内外。次いで祈祷会あり、二十五名出席するを常とす。尚ほ同教会にはエポース同盟会の設けあり。先月初旬に於て文学会を開き、宗教並びに人生問題の質疑会となし、約四十名会せり。青年學者の煩悶、疑問に対して高木氏適當なる解決を下され、一同満足して散會したる由なり。〉(『基督教世界』M 39.4.19)
〈〔教報〕○本多高木両氏送別会 今回渡米の途に就かるゝ本多、高木両氏の為め、去る七日午後六時より麹町区平河町宝亭に於て送別会を開きたり、高崎介蔵氏発企者を代表して主人席につき、小

畑久五郎氏の祝謝を以て筵は開かれたり、而して食後高崎氏両氏を送るの辞を述べ、次で本多、高木両氏の丁寧なる謝辞あり、それより山路、小畑、平岩等諸氏の送詞あり、主客十分の歡を尽くして散会せるは殆んど八時なりき、来会者の氏名は即ち左の如し。龍居頼三、池田次郎吉、水上梅彦、舟橋雄、平岩愼保、永持徳一、三上操六、高木信威、小林梅吉、浅井音吉、山鹿旗之進、石坂正信、高木正義、普賢寺轍吉、桜井成明、小畑久五郎、酒井温理、和田劍之助、藤原俊雄、白鳥甲子造、河合虎次郎、高杉瀧蔵、暮田治三郎、小西平吉、川崎芳之助、飯久保貞次、高崎介蔵、武田芳三郎、白井幸吉、松島剛、山路弥吉、兼藤良三郎、藤江恵五郎、中村忠蔵) (『護教』M 39.7.14)

- ③ 〈拜啓 八月五日付芳翰九月廿九日著正二拜見仕候海上御無事御著米、且つ晩港に於て第一回の英語演説に御成功被遊候趣大慶之至に奉存候三派の委員に於て可決致し候模様、過般亭享送別会席上に於ける諸氏の意見より見れば樂觀三分悲觀七分に候ひしに案外にも運動着手以前に於て大勢の確立致し候事全く天意と存候合同成りて前途の希望満々たると共に吾等の責任ハ一層の重さを増したることを自覚せざる可らず、大に奮勵して吾等の上に与へられたる責任を完ふすること肝要と存候……〉(《高木壬太郎宛河合虎次郎書簡 [M 39.9.5]》【東神大】)

- ④ 「追懐」『護教』M 45.4.5

- ⑤ “当年会是青年客、今日重来白髮翁、今日当年成一世、幾多興替在其中と康節は再び洛陽に至りし時吟じたりしと申候。余は曾て青春の客として此地に來り、今日重ねて又青年の客として來り候事にて(日本にては中年なれ共、当地にては相變らず青年と見られ申候)勿論白髮の翁として來りたるには非ざれ共、「今日当年一世を成す、幾多の興替其中に在り」と云へるは余の場合に於ても眞実のやうに相感じ申候。……”(「トロントより [三たび]」『護教』M 39.10.6)

- ⑥ “[明治 39 年] 七月廿日 金 晴 味爽起床、家族ト共ニ礼拝。午前六時人力車ニテ新橋ニ向フ。見送ラル、モノ、高木正義、池田次郎吉、倉長巍、平岩愼保、河村八郎次、同息、池田常太郎夫妻、武田芳三郎夫妻、小林トヨ、天竺トモ、同常太郎、種田富生、望月潔、大熊氏広、江原素六、小畑久五郎、堀田達治、別所梅之助、曾根銀次郎、武内宇作代理、奥野夫人、名取エツ、坪内幸之助、吉田利管、田島他吉、高山イツ諸氏ニシテ、横浜迄見送ラル、モノ、平岩、河村息、之ニ品川ヨリ山路夫妻ヲ加フ。家族(二郎ハ後ヨリ)及ビ大石五郎平ハ横浜ヨリ定平及幸吉共ニ船迄見送ラル。船中ニテ中瀬古六郎氏ニ逢フ。氏モ亦同船ニテ米國ニ向フ。此船ニハ又小村全權大使及其一行ヲ載ス。船室ハ二六三、臥床ハ一三五、鈴木氏室伴タリ。正午十二時ヲ過グル廿分抜錨。”『日記』

“[明治 39 年] 七月廿六日 木 晴 此夕甲板ニテ小村氏ト支那ノ事其他ニ付語ル。余問フ、米國品排斥ハ康有為一派ノ所為カト。答テ云ク、真相尚未ダ明ナラズ、或ハ革命ヲ欲スルノ徒困難ヲ醸シ其機ニ乗ジテ事ヲ為サンガタメ企テタルモノナランカ。又問フ、支那ニ革命アルベキヤ。答テ云ク、革命ノ機ハ既ニ屢々之レアリ而シテ彼等為ス能ハズ、彼等ハ唯議論上ノ雄ノミ、実行シ得ベキカナシ且支那政府ハ着々改革ニ従事シツ、アリ、恐ク革命ノ事ナカラン。又云ク、支那ニ在テ難問題ハ布教問題也、所謂教民非教民ノ争也、云々。”『日記』

- ⑦ “[明治 39 年] 七月卅一日 火 晴 ……本多氏ノ書簡ヲ受取ル。同氏ハ廿六日シアトル着ノ由、云ク、十八、九両日バファルーニ三派委員会合、三派ノ合同ヲ可決セリ、監督ハ八年在職、再選ヲ得、長老司ハ年会ノ指名セルモノヨリ監督選抜スベシト。合同問題一段落ヲ告ゲタルヲ祝ス。”『日記』
〈八月一日晩香堰坡り御郵送之御端書昨日到着拜見仕候…… 扱貴兄御上陸前吾人多年之宿望たる三派合同成就せし由本多兄も上陸前或ハ上陸頃其吉報ニ接せしならんと当地にてハ噂致候青山なる拙者方へハ七月廿五日電報あり右承知仕候……メソヂスト諸派合同の事たるや今や我邦の社界一般に致候様相成候……爾後日本人信徒の其責任の増加せしを覚候就ては向後解釈すべき活問題数多あるべきも其内に就き尤も急なるものは(一)三派の融合同化を催すの方策、(二)財政の進歩整理を得るの方策、(三)經濟上獨立の教会を増殖する伝道方策、(四)日本人と宣教師との間に協同互補の道を得るの方策、(五)外国伝道会社と道義上の友誼親和を全ふするの方策、(六)日本現時の状態必要に応じて大に伝道を振興し吾人の責任を全ふするの方策、(七)伝道士を奮興せしめ之を養成するの道及神学校の革新成備を遂行する方策等ならん。此等は皆實に自前急需の事柄、合同新教会の死

活に関するものなりと信じ候依て此等の事柄を計画成就する際加奈陀及米国の諸教会が同情を寄せ直接間接の友助を与へられ候様貴兄御地に於て御吹聴御尽力被下度候……」（《高木壬太郎宛平岩恒保書簡〔M 39.8.25〕》【東神大】）

〔教勢〕○高木壬太郎氏談 氏は昨年七月加奈多に渡航し、同地に滞在せらるること約三カ月、欧州各国を巡遊して此の程帰朝せられたる同氏を訪ふ。氏の談話の大意を記せば曰く「余は七月末バンクウバアに上陸、直ちにトロントに赴く、途に合同問題既に可決せられたりと聞きぬ。其の会議の成行に就きてサザランド氏の余に語られたる所に由れば、彼のメソヂスト独立期成会の発せられたるより北米に於ては、日本人の意気、或は自ら独立の教会を建設するにあるやも量るべからず、今に於て其の合同を許すに非らざれば事態甚だ面白からざるものあるべしと論ぜらるるに至り、遂に此之を許すに決せしなりと。彼の期成会は斯る動機に由りて設立せられたるに非らざるも意外の影響を合同問題に与ふる事となりぬ。然れども此は単に余がサザランド氏に就きて聞き得たる所にして唯半面の観察なるやも知るべからず」と。次に合同の前途に就きて陳べて曰く「抑も此の運動の始められしは日本に於けるメソヂスト各派の健全なる発達と外部に伝道する便宜を得んがためなり。若し情実纏綿せられ、断乎たる改革を躊躇すべきことあらば余は其の前途を楽観する能はず。教会維持の財源の如きも教会の進歩を妨ぐべき方法は如何なる困難あるも断じて避けざるべからず。徒に情実に制せられ、意気なく、精神なく、弥縫を事とし、他に拠りて僅かに立つが如き有様ならば寧ろ合同せざるに若かず云々。」（『福音新報』M 40.1.24）（→「美以三派合同」一記者『東京朝日新聞』M 39.8.9）

⑧ 「メソヂスト三派の合同成立す」『護教』M 39.8.4

⑨ 〈……友人高木壬太郎氏、八月十八日、加那太トロントより書を寄せて曰く、申上たきは当国至る処の都市、支那人を見ざるこなき一時に有之候、バンクーバーより当地に至る二千八百哩、幾十幾百大小の停車場に停り申候ことなるが殆んど凡ての停車場に於て支那人を見申候……商業致富の道にかけては彼等が数日の長を有するは今更申す迄もなきことなるが、日本人の朝鮮、満州に於て為しつゝある有様は如何云々、……）（『隣国評判記（一）』愛山生『東亜』M 39.9.20）

“……戦勝後尚日本人の商業道徳に就ては彼此の非難有之、日本商人の信用は支那商人のそれに及ばずとの声を耳に致し申候。此点に於ても武士道に顕はれたる真実の一義を商業道に 응용致さねばならず、基督教会が今一層切に実業界伝道の急務を悟り又実に伝道の実効を奏する様致度者と存候。……”（『晩香坡より〔再び〕』『護教』M 39.9.8）（→「トロントより」『同〔再び〕』『護教』M 39.9.22, M 39.9.29）

⑩ 前掲「トロントより」, 「トロントより〔三たび〕」, 「同〔四〕」坎堂生『護教』M 39.10.6

“……明治三十九年夏先生（＝本多庸一）がメソヂスト三派合同問題に関し有志者に推されて渡米せらるゝや、自分も又加那太メソヂスト教会総会に出席せんため渡米したりしに、先生は嚮きにトロントに到着せる自分の下宿を訪ひ、此処に数日を送られたりしが、時盛夏の候とて炎暑甚しかりしかば自分は毎日先生を自分の母校なるヴィクトリア大学の構内に伴ひ、芝生の上に座して故国教会の前途など語りつゝ、日中の暑を避けたりしが、先生は此時も「聖書の高等批評とは一体何のことか実は僕には少しも分らぬ」と申されたることありき。勿論先生は高等批評のことを全く知らざりしには非ざれども、自ら其造詣深からざるを思ひて斯くは語られし也、先生の如きは孔子の所謂「知るを知るをせよ、知らざるを知らざるとせよ、是知る也」といへるものにして、無知の如くにして実は大智者なりしなり。……”（前掲「追憶」）

⑪ 「モンリオールより〔三〕」『護教』M 39.10.27

⑫ “〔明治39年〕九月一日 土 晴、昨日ノ如ク冷也。……ドクトル、イービー(1) 及ノルマン氏(2) ニ贈ル書ヲ認ム。イービー氏ニ対シテハ氏ガ日本ニ帰ラントスルニ同情ヲ表ハシ出来得ルノカラ尽サンコトヲ申送り、ノルマン氏ニハイビー氏ノ件及帰途欧州ヲ経テ帰国シ得ルヤウ尽力セラレン事ヲ依頼スル旨ヲ申送レリ。午後カーマン博士ヲ 42 Murray ST. ニ訪フ、時ニ三時半ナリ。イービー氏ノ事ニ関シ助言ヲ与ヘラル。……”『日記』

- (1) 〈My dear Bro. Takagi, glad to get your letter. Mr. Yamaguchi ① and Y. Yoneyama ② our lay delegates from Japan, have both written me very urgently to go back to Japan, and now I am glad to find you of the same mind. How does Bro. Norman feel in the matter? Mr. Coates has been writing year after year for me to go. The way never seemed to be clean until now. I wanted to know that the Japanese were urgent for me to return. Now I feel that the time has come, and if you act wisely and earnestly, I think you can bring it about.……〉(《高木壬太郎宛 Charles Eby 書簡 [1906.9.3]》【東神大】)
- ① 〈……吾人は吾等の如き新志操を有する宗教家に待つこと大に的である、帰朝せは必ず君の太鼓持ちとなつてもよい、大に陳を強ふして戦いたいものだ、イビー氏一件は、何とか氏を日本に再び送りたいものだ、君大に力を尽してやり給へ、……必ず氏の決心、修養は日本人を益すること多大たと考ふる故、セイレフリースを射殺す様にして下さい、射殺すことか出来ぬ時は徳化し給へ、……〉(《高木壬太郎宛山口三之助書簡 [M 39.9.8]》【東神大】)
- ② 〈〔編輯机上〕イビー博士と米山豊氏 近刊「甲府評論」に在加那太オンタリオ農学校米山豊氏の「日本メソヂスト教会々友各位に訴ふ」と題する頗る長き論文あり、事はイビー博士の功德を称讚し、再び我国に迎ふるの拳に出でんことを勧告するに在り、……〉(『護教』M 40.5.18)
- (2) 〈Dear Bro. Takagi: -Your letter of Sept. 1 st reached me last evening after I returned from the meeting in the Church here.……In regard to Dr. Eby's return to Japan I also had a letter from Dr. Meacham. When Dr. Meacham was in Japan during recent years I never heard him say a word in favor of having Dr. Eby sent back to Japan. Perhaps he may now be able to do something more to effect his purpose which he expresses in the letters to you & me. I am willing to do what I can but there are some things which I would like to talk over with you & with Dr. Meacham concerning the matter. I will hope to see you in Montreal next Tuesday afternoon. I will write to Dr. Meacham as soon as I find time & get a more definite idea of what he thinks we ought to do.……〉(《高木壬太郎宛 Daniel Norman 書簡 [1906.9.6]》【東神大】)
- ⑬ 「遙かなるプラトウー漂泊の宣教師—C. S. イビーの自伝を中心として—」保坂忠信『山梨学院大学一般教育論集』S 56.2, 「カナダ・メソヂスト教会の日本宣教師の形成—C. S. イビーの活動を手がかりとして—」高嶋祐一郎『キリスト教社会問題研究』H 4.3
- 〈明治40年、万国革新会亜細亜書記に任ぜられたイビーは、本部を東京に置いて運動を試みようとしたが、これも実らずに終わった。〉(「シー、エス、イビー博士」『護教』M 40.5.25)
- ⑭ 〈〔個人〕高木壬太郎氏 去る十月十六日、ヴィクトリア大学に於て神学博士の学位を授けられたりと、〉(『護教』M 39.11.17), 〈〔彙報〕▲高木壬太郎氏 目下加奈多に滞在せらるる同氏は此の程「神学博士」の称号を受けられたりと聞く。〉(『福音新報』M 39.11.22) (→「恩師の遺せる教訓」T 7.7.28, 「倫敦より」M 39.12.15 共に「護教」の壬太郎文)
- ⑮ 《日記 (M 39.10.19 ~ 11.28)》
- ① 「巴里より」『護教』M 39.12.15, 「余裕論」『六合雑誌』M 41.6, 「英国宗教界の小波瀾」『宗教』M 40.3.9 以上、壬太郎文
- ② 「当行の道」高木壬太郎『新人』M 41.12
- ③ 「人生観の基礎」高木壬太郎『護教』M 42.12.4
- ④ 「基督教会と近代の思想〔上〕」高木壬太郎『道』M 41.5
- ⑤ “……私が前年欧羅巴に行つた時、埃及に下つて三日程滞在した後パレスティンに赴かんとと思ひ立つたが旅行券が無い、日本の公使館を探したが其れも無い、仕方がないから英国の大使館に行つた、処が其日は休日で門が締つて居つたが最早船が出るのに時間も無いので、無理とは思つたが小使に意を通して大使に面会して其理由を話すと大使は快く承諾して直に認めて呉れた、此時私は実に感謝したのである、若し之れが日本の公使館であつたならばどうでせう、私は英国大使館であつた事を却て仕合に思つた、英国や米国などの基督教国の政府は人民を使ふのでなくて人

高木^{みず}壬太郎の足跡をたどって

民に使はれるのである、日本はそれと反対で人民は使ふべきものに考へ上から下まで人を使ふ氣で此り飛ばして居る、……”（「根拠ある信仰」『女子青年界』T 2.1）

16 〈〔個人〕高木壬太郎氏 一月三日神戸着の汽船博多丸にて帰朝すべしとの報あり。〉（『護教』M 39.12.15）、〈〔個人〕高木壬太郎氏 二日神戸に着せられ、……〉（『護教』M 40.1.12）

《日記（M 40.2.21～2.26）》

17 〈静岡県、特に川根地方には、昔から傑出した人材が少ないといわれます。大臣、大将といった顯官の名は、たしかに郷土の歴史には、見当りませんが、ここに紹介する高木壬太郎博士は日本で初めて、神学博士の称号を贈られた誇るべき郷土の大先覚者で、のちに東京の青山学院長となり、明治から大正へかけてのわが国の宗教哲学界に高くその名を知られた人です。……〉（「わが父を語る」高木二郎『広報 中川根』S 37.5→「郷土の偉人 高木壬太郎博士」『中川根ふる里通信』H 1.1）

〈……博士は東海道島田駅より十数里の山奥に僻在する遠州長尾村の人。余は島田に伝道せる折柄、二回同地を訪問せるが、「ナザレより何の善き物出でんや」で、かかる山村より氏のごとき人物の現はれたるは異数とすべく、また仏の哲学者ベルグソンは師範学校出身者なりと聴くが、静岡の師範学校より氏のごとき人物の輩出せることも空前の出来事と云ふべく、而して同地方の人士が、氏の出世を目して立志伝中の人と推賞し、賛美するも当然の次第なりと信ぜらるる。……〉（倉長巍『高木壬太郎博士を追想す』T 11.8.31【東神大】）

18 「智識ヲ得ルノ法〔承前〕」『静岡青年会雑誌』M 21.8

高木壬太郎 略年譜

元治元年(1864)	5月20日（陽暦6月23日）	遠江国榛原郡中川根村上長尾に、高木源左衛門・その子の長男として生まれる。
明治2年(1869)	5歳	この年から、河村半山に就いて孔孟の書を学ぶ。
明治4年(1871)	7歳	この頃から、父や伯父（八木又左衛門）に啓発され、福沢諭吉の著書に親しむ。
明治7年(1874)	10歳	1月 長尾学校（智満寺）に入る。
明治9年(1876)	12歳	10月 長尾学校（高郷・夕宮地に新築移転）開校式で生徒を代表して祝詞を述べる。
明治10年(1877)	13歳	10月 長尾学校下等小学全科修了。岡田清直（掛川の蘭学者）の家塾に入る。（傍ら掛川学校へ通う）
明治11年(1878)	14歳	3月 静岡師範学校入学。
明治12年(1879)	15歳	10月 静岡師範学校一等小学師範学科から新設の高等師範学科に転入。この年（または前年）、山路弥吉と出会う。
明治13年(1880)	16歳	「政治」を志し、慶応義塾遊学の機を待つが実現せず。 10月 詩文雑誌『呉山一峰』創刊。
明治14年(1881)	17歳	5月 静岡師範学校高等師範学科卒業。 8月 御殿場村立中郷学校へ校長（三等訓導）として赴任。
明治15年(1882)	18歳	4月 自由民権運動（改進黨に共鳴）に傾き、御厨懇親会を主催。
明治16年(1883)	19歳	3月頃、政談演説会場に客氣をふるう。
明治17年(1884)	20歳	2月 中郷学校を辞する。 3月 静岡県より県下教育の功績を認められ白袖一反を与えられる。 7月 二等訓導に昇任。小学校巡回訓導（榛原郡書記）に就く。 9月 静岡県より中郷学校へ教育費寄付に対し木盃一個を与えられる。この年（または翌年）、米国行を企てるが果せず。
明治18年(1885)	21歳	4月10日 母その子死去。 7月 小学校巡回訓導を辞する。

高木^{みず}壬太郎の足跡をたどって

		8月 静岡県衛生課御用掛に就く。 夏頃、山路弥吉・太田虎吉・池田次郎吉らに導かれ、静岡教会（平岩愼保牧師）の扉をたたく。 10月 大石梨花と結婚。 12月 静岡青年会発足。 この年、静岡県より職務勲励をもって金三円を給される。
明治19年(1886)	22歳	2~3月 種痘規則説明と衛生視察のため静岡県下六郡を巡回。 8月 「任静岡県属 叙判任官十等」の辞令を受ける。専心神の道を探ろうと聖書を読み、平岩牧師の説教を聴き始める。 10月31日 平岩牧師より洗礼を受ける。 12月25日 長女・俊子死去（在世七日）。
明治20年(1887)	23歳	1月 三島小学校（首座訓導）に転任。 7月 三島小学校を辞する。 この頃から、カシディFrancis Albert Cassidyに就き英語を学び始める。
明治21年(1888)	24歳	11月 静岡（英和）女学校開校。 3月 基督教演説会（静岡若竹座）で「基督教と進化説」を弁ずる。『心の写真』（最初の著書）刊。 4月 静岡教会の福音士に任じられる。『静岡青年会雑誌』創刊。 8月 上長尾青年会 ^{いんぎょ} で聖書を講ずる。 11月21日 長男・一三誕生。
明治22年(1889)	25歳	5月 日本メソジスト教会第一回年会で教職試補に挙げられる。 9月 上京、東洋英和学校神学部に入る。
明治23年(1890)	26歳	6月 東洋英和学校神学部英語科第一年級修了。 7月3日 弟・木三郎死去。 7月 築地教会牧師に任命される。
明治24年(1891)	27歳	7月 『護教』創刊。 この年、桜井成明と出会う。
明治25年(1892)	28歳	6月 東洋英和学校神学部第三年級修了。 7月 麻布教会牧師に任命される。 9月24日 次男・二郎誕生。この年から翌年まで、東洋英和女学校の商議員（書記）をつとめる。
明治26年(1893)	29歳	6月 東洋英和学校英語神学課程卒業証書を授与される（卒業論文はエレミヤ論）。
明治27年(1894)	30歳	7月 接手札を領し、日本メソジスト教会教職（正格教師）となる。 11月3日 三男・武夫誕生。
明治28年(1895)	31歳	1月から翌年3月頃まで、『聖書之友雑誌』主筆。 5月 麻布教会牧師を辞する。
明治31年(1898)	34歳	9月 ビクトリア大学留学のためカナダへ渡航（11月1日正式入学）。 4月 ビクトリア大学神学会で長編論文「印度宗教の歴史的発達」を朗読。神学士Bachelor of Divinityの学位を授与される。 9月 カナダ・メソジスト教会総会に日本代議員として列席。 10月 帰国。 11月 東洋英和学校神学部教授となる。築地教会牧師を兼ねる。
明治32年(1899)	35歳	6月 中央会堂牧師となる。
明治33年(1900)	36歳	5月 駒込教会牧師（中央会堂と兼牧）に任命される。
明治34年(1901)	37歳	7月 『護教』の発行兼編輯人となる。
明治36年(1903)	39歳	10~11月 ウエスレー降生百年記念運動応援のため山梨・静岡・長野へ。
明治37年(1904)	40歳	6月 中央会堂・駒込教会を辞し、麻布教会牧師となる。青山学院神学部

高木^{みず}壬太郎の足跡をたどって

		教授を兼ねる。
明治39年(1906)	42歳	5月 日本メソジスト教会第十八年会でメソジスト派の合同を訴える(翌年5月成立)。 7月 カナダ・メソジスト教会総会(9月)に日本代議士として出席のため渡航。 10月 ビクトリア大学で神学博士Doctor of Divinityの学位を授与される。帰途、ヨーロッパ諸国・エジプト地方を遊歴(翌年1月帰国)。
明治40年(1907)	43歳	4月 異端説起こり、麻布教会牧師(5月)・『護教』主筆(7月)を辞する。青山学院神学部教授専任となる。 10月 『基督教大辞典』(警醒社書店)の編纂に着手(明治44年11月刊)。
明治41年(1908)	44歳	7月 同志社夏期神学校で「新約神学」を講ずる。
明治42年(1909)	45歳	1月4日 父・源左衛門死去。
明治43年(1910)	46歳	1月21日 伯父・八木又左衛門死去。
明治44年(1911)	47歳	3月 青山学院理事会員となる。 10月 『護教』の主任記者に選ばれる。
明治45年(1912)	48歳	3月26日 本多庸一死去。 4月～ 宗教大学に出講。
大正元年(1912)		11月 八木又左衛門の顕彰碑を建てる。
大正2年(1913)	49歳	3月 青山学院々長に推される(5月就任式)。 12月 青山学院拡張案成る。
大正3年(1914)	50歳	4月 『護教』編輯主任を辞する。 11～12月 青山学院拡張講演のため北海道・東北へ。
大正4年(1915)	51歳	1～2月 腸チフスのため入院。
大正5年(1916)	52歳	2月 青山学院高等学部 ^に 人文科・英語師範科・実業科の三科を設置。 10月 糖尿病の診断を受ける。
大正6年(1917)	53歳	2月 脳溢血で昏睡状態に陥る。 3月15日 山路弥吉死去。 5～9月 御殿場で静養。
大正7年(1918)	54歳	1月 青山学院々長館落成、移転。 9月 父・源左衛門の墓碑を建てる。 11月 青山学院高等学部校舎(勝田館)完成。
大正8年(1919)	55歳	7月 青山学院拡張講演のため東海道を巡回。 11月 妻と山陽・九州を巡る。
大正9年(1920)	56歳	1月 『護教』を『教界時報』と改題。 12月 青山学院理事会で大学設置案を可決。
大正10年(1921)	57歳	1月10日 霊岸島病院に入院(腸チフスの反応あり)。 1月27日 永眠。